

日比嘉高著 『いま、大学で何が起きているのか』

波瀲, 剛
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/1787564>

出版情報 : 九大日文. 26, pp.43-48, 2015-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

《特集 文学と教育》

日比嘉高著

『いま、大学で何が起こっているのか』

NAKAGATA Tomohiko
波瀾 剛

本書は日本文学研究者による大学論である。したがって著者がいうように、論者としては「アマチュア」でありながら、大学教員の一人としての、当事者による問題提起だといえる。

一章から成るそれぞれの論考は、章タイトルにもなっているように、「大学をめぐって、いま何が起こっているのか」について綴っている。さらに、日本の大学が真剣に検討すべき未来像について、議論の材料を提供してくれている。章立ては以下の通り。

- I 大学はどこに向かうのか
- 第1章 国立大から教員養成系・人文社会科学系は迫り出されるかもしれない
- 第2章 大学をめぐって、いま何が起こっているのか
- 第3章 「大学改革」が見ていないものは何か
- 第4章 大学の「グローバル化」とは何か
- 第5章 語学教育と覇権主義

第6章 「大学は役に立つのか？」に答えるならば 総論

編
第7章 「大学は役に立つのか？」に答えるならば 日本
文学研究の場合

II 変化するキャンパスと社会

第8章 東京大学「軍事研究解禁」騒動とデュアル・ユース

第9章 教室が「戦場」になった日？——新聞による大学
授業への介入を考える

第10章 なぜ『はだしのゲン』を閲覧制限してはいけない
のか？

第11章 遊びの世界、仕事の世界

第12章 生涯学習は私たちの社会の新しい管理形態なの
か——教育再生実行会議・ドウルース・学びの両義性

第I部「大学はどこに向かうのか」では、国立大学の教員・教育組織再編問題に端を発し、再編を促す前提の一つとなっている「グローバル化」を抱える課題、さらには人文系の学問がしばしば「虚学」として扱われることへの反論と、興味深い指摘が続く。

二〇一四年八月に国立大学法人評価委員会が行った提言は、人文社会科学系学問領域の大学組織における危機的状況を如実に示すものだった。国立大学法人の組織及び業務全般の見直

しに關する視点」について(案)において、「教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院」は、「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むべき」だと提案している。この文言が、著者や私を含め相当の国立大教員に衝撃を与え、その後さまざまな議論を巻き起こしたことにについては、新聞やネットなどで目にした人もいるだろう。

その後、内容をめぐって釈明はなされたが、現在の国立大学における組織再編の動きを見れば、著者のいうように、「文科省は本気」(四頁)であると思わざるを得ない。その場合懸念されるのは、「国立大学だけではなく、公立大私立大も含めた、教員養成系、人文社会科学系組織の壊滅的な弱体化である」(五頁)。というのも、現在の改革は第一に、「競争を重視し効率化を重んじる新自由主義的な経済思想」に基づき、「文部科学省(および間接的な財務省)が志向する大学のコントロール強化策」という前提がかなりはっきりと打ち出されているからである。それに加えて、「排外主義的・保守的な勢力による大学への圧力」(二二頁)が追い討ちをかけている。

国立大学の機能別分化は、教育のあり方よりも経営の論理を優先する「選択と集中」に主眼があり、「この方向性が産業競争力会議で議論されていることからもうかがわれるように、基本にあるのは経済振興である」(二五頁)。したがって、「大学の機能分化は一見合理的で前向きだが、裏を返せばそれは大学の機能限定である」(二八頁)と指摘する。こうした方向を目指すならば、「経営化」そして「グローバル化」という旗印の下に、

短期的な成果が常に大学に求められ、評価し易いものだけが残されてゆくことになる。しかも前提となる「グローバル化」は、「私たちの身近なところで進行している」、いわば「足もとのグローバル化」(四三頁)をほとんど省みることなく、英語圏のトップ・クラスの大学と肩を並べるための英語教育を一義的に指しているため、大学の多様性を自ら否定してしまうことにながりがかねないと説く。

では、巷で噂されるほどに大学は役に立たないのか。この疑問に対して著者は、そもそも世の中の考え方とその体系が、「基礎」、「応用・発展」、そして「変遷」から出来上がっていることを学ぶことができ、一つの問題に対して複数のポイントから判断を下すプロセスを習得できる重要な場として機能していると答える。学生にとっては、比較的自由な時間を確保し、短期的な成果を求めずに、いつか芽を出すかも知れない知性の「種」をゆつくり手間暇かけて、結実させたり、実らせることができずに挫折したりという経験を積む、かけがえない機会であると強調している。

さらに、大学で文学を学ぶ意味についても、「1 日本の文学的資産を循環させ、再生産に寄与する」、「2 「文学に關わる」ための技術・嗜好・時間を獲得する」、「3 文章を「何が書いてあるか」ではなく「どう書いてあるか」の視点で見られる」、「4 文学は他領域へ関心や知識が伸びていくよい導きとなる」⁵ 日本文学は、日本人による日本人のためだけの文学では(昔も今も)ないと知る」(七三頁)と列挙している。特

微的なのは、最後の5であり、先ほどの「グローバル化」に対する問題意識とも関わっていて、同業者ながら、「多文化間の活発で長期的な交流が、現在の日本文学の豊穡さの根源である」（七九頁）ことの重要さを、あらためて確認した気がする。

また、日本文学研究についても、たんなる趣味の領域としてではなく、過去の文学的資産を整備して文化維持の基盤となり、文化の振興を促して外交の一翼を担い、「知日派」の留学生（親日派とはニュアンスが異なる）を育て、国語教員を育てる機関として存在する意義があることを、疑問を抱く人たちに向って丁寧に説明を試みている。

第Ⅱ部は趣きを変えて、大学という場が、外部の世界からいかに直接的な介入を受け始めているのか、また、それに対して自己規制を過剰に行うことなく自立性を保つ方法はないのかという論を展開している。

東京大学を標的とした「軍事研究解禁」騒動、広島大学に対する産経新聞の授業攻撃など、大学における学問の自立性がどこまで保たれているのか疑問と思わざるを得ないような出来事が相次いで起こっている。これは大学にとどまらず公共の図書館においても、『はだしのゲン』閲覧に関する自主規制に注目して、知のあり方の自由度が揺らいでいる点に言及している。そのうえで、社会における管理の仕組みに、まさに「遊び」の部分を作ることにメリットを見直す必要があることを指摘し、この見方は社会への緩衝地帯を設けて問題解決の糸口を探る大学というシステムとも共通するのではないかという結論に至る。

ブログで掲載されていた一連の論考は本書出版以前からメディアの注目を浴び、『朝日新聞』三月四日のオビニオン版で本書の内容を先取りする持論が展開された。ここでは経営コンサルタントの富山和彦氏の実践的な職業教育の立場と対立する論者として、「文系学部」の「考える力」を説いていたが、もちろん本書の内容をたどってきて分かるように、著者がただたんに既得権益の保持を目指しているのではない。「旧態依然」では、やっぱりだめなのである。古いものを守っていただけでは、新しい課題に対応できない」（二四頁）のである。

とはいえ早急に具体的な解決策が出る問題ではない。人文系学部の具体的な方策として新学部を発足した長崎大学や山口大学の例を取り上げて、保護者や学生からの理解を得ることの困難さを指摘してもいる。本書を刊行した時点から数ヶ月経過しているので、現在の著者には具体的な方向性が見えてきているかも知れないが、大学の現状を知らしめ、論点を共有することが目的の本書から即効薬が提示されるわけではない。この問題は個人で解決するという性格のものではないし、ブレインストーミングの場を提供してくれた本書に依るならば、ないものねだりをする前に、自分自身でもアイデアを持ち寄ってみるほうが生産的だと思う。なので、文科省が文系再編の前提とした「社会的要請」に少しこだわって本書の議論を敷衍してみたい。

ひとまず「経営化」の文脈に即して、「社会的要請」に積極的に関与することも一つの手であろう。USJでハリー・ポッターの施設が人気を呼んだように、文学作品をテーマ・パーク

や観光施設で活かすアイデアをどんどん提供するといったことを在学時から想定して、学生が文学史や解釈の仕方を学び、その知識を十分に活かして、やがて産業界で貢献することは可能である。日本各地の観光地と文学者の意外な接点を見だし、地域の魅力として売り出してゆく。ゆるキャラのストーリー性を既存の文学者の生き方や作品世界と関連づけて創出する。文学作品が原作の映画・ドラマ・ゲーム・アプリ作りに文学を専攻して学んだ知見を活かす。商品パッケージや店内インテリアの装飾に文学作品の名文句を活用する、それと関連するかたちで文学者とのコラボを企画する。書店や図書館、出版社のHPや書評サイトのデザインに文学者としてのアイデアを提供するといったわりと扱い易い領域ばかりでなく、文学研究の世界にとどまらないかたちで、文学を活かしてゆく方向を示すことは可能である。

また、「社会的要請」の「社会」は、なにも「会社」だけを指すわけではないのだから、特定の企業に限定することなく、広く「社会」の「要請」を想定して、それに貢献する方法もあり得る。自身が子育て真っ最中にある日常からすれば、乳幼児に対する絵本などの読み聞かせは、作品への深い理解のうえに行われたほうが良いとつねづね思う。だからといって、すべての親が文学好きであるわけではないし、ゆっくり読み聞かせの時間を作るのも決して簡単なことではない。そんなときに、文学専攻の学生が、地域や大学の図書館で読み聞かせをする活動をしたらどれほど「社会」の役に立つことか。幼児教育の課程

では行われていることかも知れないが、いわゆる文学部で、純文学で卒論を書くという学生が取り組むとしたら、そうした学生なりの活躍の仕方があるだろう。外国文学の専攻者が、絵本の翻訳を通じて、在住外国人の家庭向けに文学作品の読み聞かせを行うことも十分考えられる。

小学生になると義務づけられる夏休みの読書感想文の書き方教室、最近活気づいてきたビブリオバトルなどについても、同様のことがいえるし、別に学校にこだわらなくても、想定できることは多々ある。家庭で利用しなくなった絵本や小説の文庫本などを無償で提供してもらい、必要とされるコミュニティや公共施設、介護施設や病院などで融通し合うあうサイトを立ち上げたり、海外の絵本と日本の絵本を同様にして交換するような仕組みを実現するためにクラウド・ファンディングを計画したりすることも考えてみる価値はある。路上生活者向けの文学賞があると知って、そこに応募したいという人がいるとしたら、そのサポートの仕組みを考える。就職した後に企業で求められる戦略としての「ストーリー」や「ドラマ性」について学びたい人がいれば、現在の文学理論という立場から講義、研修を行う。企業を定年退職し自分の人生を振り返って半生を題材にした文学作品を執筆したい人がいたら、修辭の技法や論理の組み立て方を学ぶ機会を提供したり、話し合いを通して、自己の半生を対象化していく作業を手伝ったりする。こうしたことを学生、教員の共同によつて展開する可能性はあり得る。

とはいえ、どのようなかたちでの活動であれ、それは文学史

と作品への理解が系統立って行われている必要がある。アイデアを提供するといっても、ネットで探した文学史の年表をそのままたどってもなかなか新しい切り口は出てこない。文学史をきちんと学び、自分なりの情報調査によって新たな知見を提供するという訓練を受けてこそ、「役に立つ」人材となる可能性が高まる。同様に、文学作品を読み、自分なりの読み方を「解釈」として提示するには何が必要かということを学んでおかなければ、他の人にその方法を伝えることはもちろん、実践のサポートも有効に機能はしない。

「ディシプリン」として学ぶことの重要性は、「国際社会」においても当てはまる。著書のなかでも、留学生の養成について触れているが、人文系の場合は、出身国の大学において「日本学」といわれる領域のひとつとして日本の文学や文化を学んでくる可能性が高く、日本の大学に来てディシプリンを系統立てて学ぶことはきわめて重要である。留学してきた学生の興味の多様さやスケールの大きさには感心もし、驚きもする。だが、実際にその興味を突きつけるためには、ひとつの、あるいは複数のディシプリンを吸収しておかなければならないことが圧倒的に多い。したがって、既存の学問体系を壊してしまうことは得策ではない。

留学生に限らず、大学は「国際社会」に開かれている。この「国際社会」は国外のみを指すのでなく、日本の中の「足もと」の「国際社会」も含んでいる。この意味も含めて、大学は「地域社会」にも開かれている。公開講座を通して大学教員と地域

住民が接点をもつというのも一つのあり方なのだが、「知識」を提供するのに加えて、「知恵」を出し合う方策を真剣に検討する必要はあるだろう。自然災害、格差社会、生命倫理などについて、国立の総合大学であるならば、人文社会学系と自然系の教員が同じ大学の一員としてプロジェクトに参加することが可能であるし、その強みを活かすことができる。経営効率を優先し、国立は理系、私立は文系という区分が出来上がっていくならば、大学は地域貢献の手段を自ら手放すことになりかねない。

専門性の高い大学には特化した専門度の高い要求に応える能力と人材が存在し、私立の大学は時代の趨勢にいち早く反応し、フットワークの軽さを活かした貢献の仕方があり、公立、国立の総合大学には領域横断的で、すぐにどうなるか分からない問題にあえて取り組む点でのメリットを活かせば良い。専門性や時宜性を踏まえた「選択と集中」によって優先度の低くなる課題は出てくる。しかしそうした課題を結びつけ、新たに組み合わせることで、単独では気づくことのなかった重要な問いを導き出し、その解決を模索することによって、従来にはない価値を見いだすことができれば、文字通りのイノベーションを創出することができる。

個々の大学が「理念」に基づいてこうした取り組みに従事し相互に連携すれば、それぞれのイノベーションを武器にして、十分、「社会的要請」に適うはずである。その際、縦割りの機能分化や競合関係にこだわることなく、接点を共有しながら知の蓄積を継続するほうが相互の利益になるし、大学がリアルな

空間として知の発見を促すインフラとなる力をさらに増すことになるだろう。

「世の中のさまざまな課題を解決するためのアイデアを産み出し、多様な問題に立ち向かえる人材を育てることも重要だ」（四三頁）という著者の指摘に全面的に賛成する。そのための努力を可視化してゆけば、大学の姿がきちんと外部に伝わるの

ではないだろうか。個々のレベルでなく、現在、大学という教育・研究機関全体に大きな課題が与えられている。まさにこの時期に本書は議論の「種」を与えてくれると思う。

（二〇一五年五月 ひつじ書房 一五一頁 一五〇〇円＋税）

（九州大学大学院比較社会文化研究院准教授）